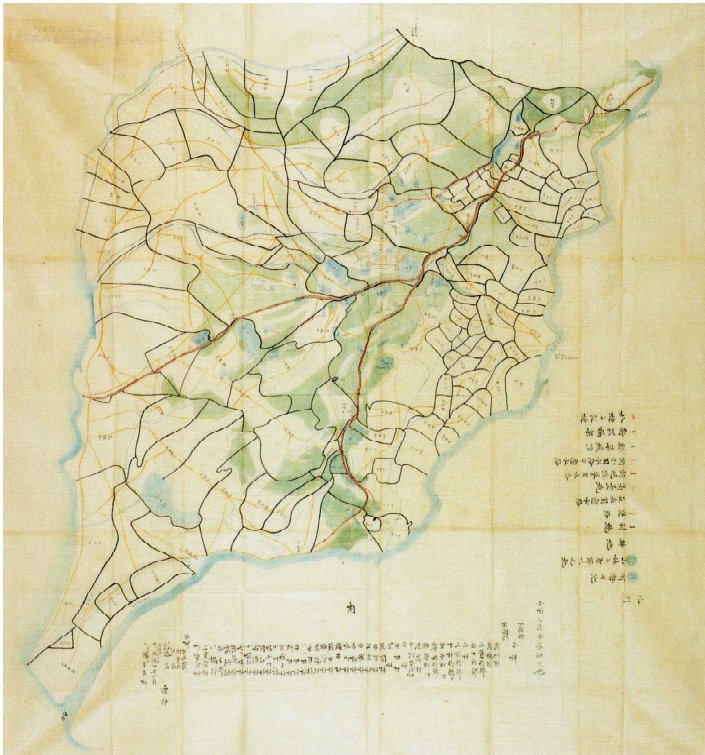


つづきやこう
都築弥厚

都築弥厚 (1765 ~ 1833)
写真：筆者撮影

厚は酒造業や田畑の資産をつぎ込み、計画実現に向け尽力をする。測量に関しては算術家の石川喜平らに協力を依頼した。農民の反対運動や妨害も乗り越え、弥厚と喜平が測量図を完成させたときには、4年の歳月が経っていた。1827(文政10)年に「三河国碧海郡新開一件願書」を幕府勘定奉行に対し提出する。1833(天保4)年、待ち続ける弥厚に許可の知らせがもたらされるが、完成を目にすることなく、同年9月、69歳で亡くなる。



「三河国碧海郡新用水路掘割納得全図」

県令安場保和により、内務省に出された願書に添付され図

出典：安城市歴史博物館『特別展明治の三大用水—安積疏水・那須疏水・明治用水—』1991

私財を投じた大用水計画

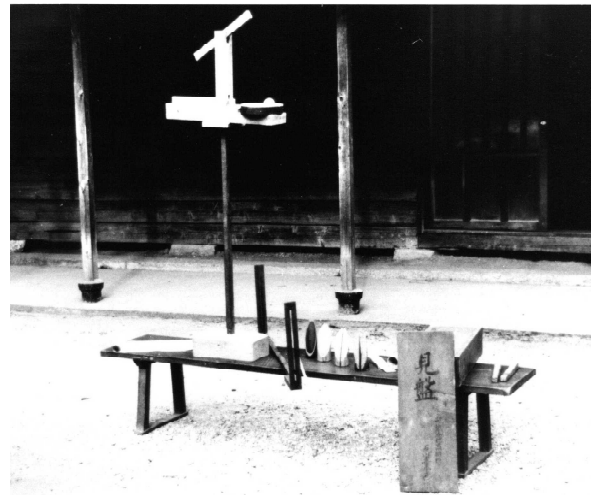
—豊かな碧海大地を夢見た男—

■ 生い立ち

都築弥厚は1765(明和2)年、碧海郡和泉村(現・安城市和泉町)に生まれた。生家は豪農で、酒造業や新田経営で成功し、弥厚は裕福な中で育てられた。

■ 不毛の大地を美田とする用水計画

碧海台地は、水に乏しく酸性粘土質地帯であったため、農民は常に水不足に悩まされ、水争いが絶えなかった。都築弥厚はこの現状にこころを痛め、用水の開削計画をたてることを決意する。しかし、矢作川の水を引き入れるとあって水害を招くおそれがあると考えた農民から反対を受け、現地測量もできずに計画はなかなか進まなかった。弥



都築弥厚の協力者、石川喜平が用いた測量器具「見盤」
明治用水記念館蔵、写真：石田正治

■ 弥厚の夢が実現した明治用水

都築弥厚が没して39年後の1873(明治6)年、岡本兵松と伊豫田与八郎によって、弥厚の遺志が引継がれた。県令安場保和は、岡本と伊豫田の計画に強い関心を寄せ、彼の下で黒川治憲が担当官となり、新用水計画の推進に当たった。

用水路の開削は1879(明治12)年に始まり、翌1880(明治13)年に中井筋・東井筋の開削工事が完成した。1880(明治13)年に通水したその水路は「明治用水」と名付けられた。

明治用水は、矢作川を水源とし、安城、岡崎、豊田、知立、刈谷、高浜、碧南、西尾の西三河地域8市をうるおす農業用水となった。水路の延長は、幹線88km・支線342km・その他小用水路約1000kmにわたる。大規模な用水としては愛知県下最古の用水である。完成後は碧海台地の農業発展の一翼を担い、「日本のデンマーク」と呼ばれる農業先進地へと導いた。

(朝井佐智子)